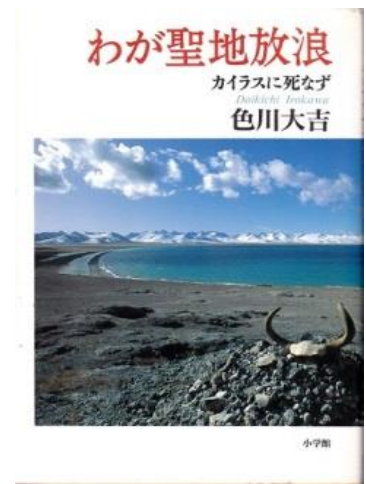
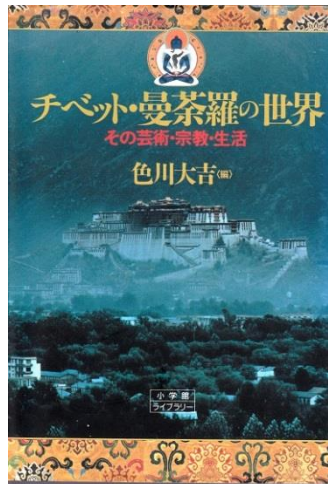


## 色川大吉著 『雲表の国―青海・チベット踏査行』

## 『チベット・曼荼羅の世界―その芸術・宗教・生活』

## 『わが聖地放浪』



2年ほど前、西寧とラサを結ぶ約2,000キロの青海鉄道が完成し、これを利用してチベットを訪れるツアーやトレッキングが人気が高いそうである。また、5、6千メートル台の未踏無名峰がゴロゴロしていると言われている東南チベット、四川、雲南、ミャンマー北部に跨る所謂“ヒマラヤの東”も中村保氏などの著書を通じて新たな脚光を集めているらしい。そのようなことから、今後チベットに足を踏み入れる方々も多いのではなかろうか。

海外登山やトレッキングは、他家のお座敷に上がらせていただくものであるから、単に登頂できればそれでよいというものではなく、やはりそれなりの礼儀作法が必要であろう。この間の事情は、かつてのヒマラヤ遠征隊などが地元とのトラブルを起こしていることから推測できよう。礼儀作法の一つはその国や地方の“文化”を理解し、その文化の上に立脚した彼らの尊厳や物の考え方や暮らし方を尊重することから始まるのではなかろうか。そのような意味で、登山ルートの研究だけでなく、そこに住んでいる人々の暮らしのありようを勉強し考えておくことも“装備”のひとつであり、またそれゆえに登山に付随する楽しみも増えると思うのだが、如何であろうか。

チベットについて書かれた書籍は、古くはスヴェン・ヘディン、ハインリッヒ・ハラー、河口慧海、多田等観、青木文教、西川一三、やや新しいものでは川喜田二郎や藤原信也など古今東西枚挙に暇が無いが、ここではチベットの人文、自然などが分かり易く書かれている歴史学者・色川大吉著&編の比較的新しい本を3冊紹介したい。

前者は、「東北大学日中友好西藏学術登山隊」の学術人文班長として著者が歩いた西寧～入吐蕃道～青海湖～青蔵公路～ラサ～ヤルツァンボ流域～ヒマラヤ～カトマンズで見聞した古代の道、遺跡、寺院、街や村や廃墟、自然の様子、そこに住む人々の暮らしや宗教を思想史専攻の研究者の目で紀行記風に記したもので、個人的踏査記であるから、正直な感想や批判的な意見も書かれていて好感がもてる。文革によるチベット民族への迫害、チベット文化や伝統の破壊についても歯に衣を着せていない。(因みに登山班の目標は当時未踏峰であった念青唐古拉山)。

中者は、同じ著者が編集した本であるが、前者とは多少毛色が変わっていて、学術班の各分野の研究者が調査した研究成果を纏めたものである。チベット民族の精神史・思想、仏教文化、儀礼と芸能などに多くの紙幅が費やされているが、中国革命に巻き込まれた民衆の暮らしと文化がどのように変容して

いったか、厳しい極限的な自然環境の中で彼らはどのような生活の仕方をしているのかといった環境と人間の側面なども記述されている。専門的な記述も多いが、じっくり読めば知的好奇心を満足させてくれる本でもあろう。

後者は、9年間に及ぶ激戦の地イラン・イラク国境からインド・ガンジスの河口まで、20年に及ぶ内陸アジアの旅で見聞し感じた人間の運命、民族の悲劇、生と死を綴った紀行である。特に聖山カイラスの巡礼行には多くのページが割かれている。写真も沢山掲載されていて、現地の様子が彷彿としてくる。

『雲表の国』 小学館 1988 年刊

『チベット曼荼羅の世界』 小学館ライブラリー1995 年刊

『わが聖地放浪』 小学館 1994 年刊

(2008 年 記)

#### [追記]

上記の3冊とは内容が異なるが、同じ著者による『ユーラシア大陸思索行』という紀行もある。こちらは、著者が米国プリンストン大学への留学を終えてから日本に帰国するまでの半年間、リスボンからヨーロッパ、東欧、中東、西アジア、中央アジアを経てインドまでの4万 km をキャンピングカーを走らせて廻ったユーラシア大陸の紀行である。

上記の探検物とはまた別の意味で興味深いので、是非一読をお勧めしたい。

中公文庫 1976 年刊

[「山書の小溪」目次に戻る](#)

